

小川鼎三『医学の歴史』を教科書とする 「薬学史」講義の試み

牧 純

松山大学薬学部感染症学研究室

【緒論・背景】 松山大学に2006年度開学した医療薬学科(6年制)において、本演者は研究室本来の科目である「微生物学」「分子生物学」に加えて、「薬学史」の講義も担当している。1年生前期の必修科目「薬学概論」のなかで「薬学の歴史」も若干扱われるが、この部分のみで学生たちが「薬学史」を十分理解把握することは期待できない。そこで興味と関心のある学生(およそ9割が選択)には、後期開講の「薬学史」(一コマ90分15回)を受講する機会が与えられる。本発表演者のような素人が担当するその内容は改善の余地が大きい。学会の諸先生方のご助言とお教を賜わりつつ、優れた教科書から着実に学ぶことで、授業構築に邁進しなければならない。

【方法・結果】 教科書には小川鼎三著『医学の歴史』(中央公論新書)を指定。適宜プリントも配る。授業の進行は教科書通りではなく、ほぼ①日本の医療と薬学に関する歴史、②世界の医療と薬学に関する歴史、③英文で書かれた医学史概観資料の読解、④特論「感染症と治療法の歴史」の順に進める。①と②は教科書の最大限の活用を試みる(講義中は索引・年表を大いに使用)。世界の中の日本を知ってもらう意味で、最初に世界編、次に日本編の講義を進めたこともあったが、高校時代に「世界史」未履修の学生には世界編はやはり馴染みにくい。いずれの学生も日本の昔のことならある程度は知っているから今では順番を逆にしている。③はその一部をあてて音読させ訳させたこともあるが、これに抵抗を示す学生が多いのが現状である。本文をもとに時代背景となる歴史の解説も行う。④は歴史の中の感染症と対策であるが、化学療法史は「微生物学」の授業の中でも扱うので主に寄生虫症も含めた感染症の史的側面にスポットをあてる。例えばマラリアの駆梅療法に興味を示す学生が多い。

【考察・結語】 上記の①~④を通して要約すれば、医療と薬学の歴史は大きく3段階、即ち第1段階「迷信や信仰の混ざる医療の時代」、第2段階「長い間の経験に基づいた時代」および第3段階「科学的合理性のある医療の時代」がみられる。しかし、第3段階の割合が圧倒的に大きい現代といえども、第2段階のやり方に頼ることも珍しくない事、時に第1段階のものすら見受けられ、寄生虫に感染する症例も出る現実も教える。学生からは毎回授業の終了後に提出の出席カードの裏面に小テストまたは感想をメモ程度に記述させる。そこには“歴史科目が不得手、人名や年号を覚えるのが苦痛”等と率直に書かれている。その点を十分配慮した授業の展開の必要性を痛感する。「薬学史」では受験科目の「歴史」のように決して記憶を強いることはしない。学生に分ってもらえて嬉しいのは、“歴史を学ぶことは決して細かな記憶が目的ではない”とか“現況は必ず変貌を遂げる”ことである。

(本研究は松山大学教授増野仁先生、郡司良夫先生に貴重な助言を賜わりつつ、会員外発表共同研究者、同大感染症学の関谷洋志、玉井栄治の参加・協力で進捗している。)